控 訴 状

平成31年1月6日

知的財産高等裁判所 御中

控訴人訴訟代理人 弁護士 日野 修男

〒416-0907 静岡県富士市中島81番地
控訴人（原告） 株式会社北里コーポレーション
代表者代表取締役 井上 太
〒100-0014 （送達場所）
東京都千代田区永田町二丁目17番17号アイオス永田町316号
日野法律特許事務所 （電話:03-5510-7373 fax:03-5510-7374）
控訴人訴訟代理人弁護士 日野 修男
〒160-0022
東京都新宿区新宿二丁目5番3号AMビル9階
被控訴人（被告） 株式会社リプロライフ
代表者代表取締役 桑山 正成

不正競争防止法に基づく差止・損害賠償請求控訴事件

訴訟物の価額 229,287,196円
貼用印紙の額 1,065,000円
郵 券 6,000円

前記当事者間の東京地方裁判所平成30年（ワ）第22646号不正競争防止法に基づく差止・損害賠償請求事件について、平成30年12月20日に言い渡された判決は、全部不服であるから控訴する。

第1 原判決の表示

- 1 原告の請求をいずれも棄却する。
- 2 訴訟費用は原告の負担とする。

第2 控訴の趣旨

- 1 原判決を取り消す。
- 2 被控訴人は、ガラス化凍結保存容器及びそれと共に用いる凍結液、融解液並びにそれらの広告若しくは取引に用いる書類及びウェブサイトその他の宣伝広告媒体において、「解凍後100%生存」、「100% survival」、「100% Post-warm Survival」、「achieving 100%, literally 100%, survival」及び「凍結卵を解凍した後の生存率100%を達成できる」旨の表示をしてはならない。
- 3 被控訴人は、インターネット上のアドレス「<http://reprolife.jp/history/>」において開設するウェブサイトから、別紙表示目録記載1、2の各表示を抹消せよ。
- 4 被控訴人は、インターネット上のアドレス「<http://reprolife.jp/products/>」において開設するウェブサイトから、別紙表示目録記載3から6の各表示を抹消せよ。
- 5 被控訴人は、インターネット上のアドレス「<http://cryotech-japan.jp/>」において開設するウェブサイトから、別紙表示目録記載7から10の各表示を抹消せよ。
- 6 被控訴人は、インターネット上のアドレス「<http://cryotech-japan.jp/about/>」において開設するウェブサイトから、別紙表示目録記載11、12の各表示を抹消せよ。
- 7 被控訴人は、ガラス化凍結保存容器及びそれと共に用いる凍結液、融解液並び

にそれらの広告宣伝物から、別紙表示目録記載 1 1 から 1 4 の各表示を抹消せよ。

8 被控訴人は、控訴人に対し、金 7 5, 9 1 7, 8 3 4 円及びこれに対する訴状送達の日から翌日から支払い済みまで年 5 分の割合による金員を支払え。

9 訴訟費用は、第一、第二審とも被控訴人の負担とする。

との判決並びに仮執行宣言を求める。

第 3 控訴の理由

1 原審は、以下のとおり、当事者の主張・立証を尽くさないうちに弁論終結した。その手続きは極めて不当であり、その結果、結論を誤ったものであるから取り消されなければならない。以下、述べる。

1-1 原審は当事者が主張・立証を尽くさないうちに弁論終結した。

第 1 回弁論期日（平成 3 0 年 8 月 1 6 日）、原告は訴状を陳述し、

第 2 回弁論期日（9 月 1 3 日）において、原告が準備書面（1）陳述した後、裁判所は予告なく一方的に弁論終結した。

以上のとおり、原審においては弁論期日を 2 回しか開かず、しかも第 2 回弁論期日において弁論を終結したものである。

当事者が主張・立証を尽くす前に予告なく一方的に弁論を終結することは、民事手続きにおける適正手続き（DUE PROCESS OF LAW）の要請に反する極めて不公正な訴訟行為であり、「訴訟が裁判をするのに熟したときは、終局判決をする。」と定める民事訴訟法 2 4 3 条に違反する。

1-2 原審が弁論再開しなかったことは不当である。

原審は、第 2 回弁論期日（9 月 1 3 日）に弁論終結と共に和解手続に付したものであるが、受命裁判官からは「和解手続中は新たな主張・証拠提出を控えてもらいたい」との指示を受けた。

ところが、和解期日（11月22日）において、和解手続きを終了し、12月18日に予定していた本訴和解手続きの期日を取り消した。

そこで、11月30日、原告は、弁論再開申立書を提出して弁論の再開を申し立てると共に、準備書面（2）、甲37～43の弁護士照会回答書、証拠説明書、証拠申出書、書類提出命令申立書を提出したものである。

原判決は、「研究報告1ないし5によっては、手順を厳密に遵守して被告製品を用いて卵子を凍結保存し融解したとしても100%の生存率を達成することができないとは認めるに足りず、他にこれを認めるに足りる証拠もない」と判示するところであるが、控訴人は「原告は、被告プロトコルを順守しても、被告製品によってはヒトの卵子・胚を凍結解凍した後の生存率100%を達成することができないことを立証する証拠を入手したので、書証を提出する。」と、弁論再開理由を明記して甲37～43の弁護士照会回答書の書証を提出したものであるから、原審は弁論を再開し「他にこれを認めるに足りる証拠」があるかどうかについて、審理を尽くさなければならない。原判決は、弁論再開しない理由を述べることなく、「他にこれを認めるに足りる証拠もない」と断じるものであり、審理を尽くしてないことは明らかであり、取り消されなければならない。

1-3 小括

以上のとおり、原審は、当事者が主張・立証を尽くす前に弁論を終結したのみならず、再開すべき弁論を再開しなかったものであり極めて不当な訴訟進行を行ったものである。控訴人は、本審において、

- (1) 原審が取り調べなかった弁護士照会回答書（甲37～43）の取り調べと、
- (2) 「被告所定のプロトコルを順守して、被告製品を使用して凍結保存したヒトの卵子・胚の融解後の生存率が100%ではないこと」立証のための証人尋問と、
- (3) 被控訴人提出の「生存率100%を達成することができる」とする証拠を弾劾する証人の採用と、
- (4) 不正競争防止法7条1項に基づき不正競争行為の立証、及び、控訴人に生じた

損害の計算をするため、平成30年11月30日付書類提出命令申立書記載の書面の提出を命じることを求め、

(5) 原審における平成30年11月30日付準備書面(2)を陳述する。

2 本件記載部分は被告製品の品質等について誤認させるような表示か(争点1)について

2-1 原判決は、「研究報告1ないし5によっては、手順を厳密に遵守して被告製品を用いて卵子を凍結保存し融解したとしても100%の生存率を達成することができないとは認めるに足りず、他にこれを認めるに足りる証拠もないから、被告から提出された証拠(乙4ないし10)の内容も考慮すれば、本件記載部分を含む本件各表示が被告製品の需要者である医療関係者や研究者をしてその品質等を誤認させるおそれがあるとは認めるに足りない」と判示する。

上記は、経験則に反する事実認定であり取り消されなければならない。

2-2 控訴人代表者陳述書(甲18)

控訴人代表者は「卵子に対してマイナス196度からプラス37度までの温度変化のショックを与えるものですので、どんな場合にも生存率100%を達成できることはありえません。かかる背景から、卵子は同時に4個から8個の複数個を採取することが多いのです。」(甲18)と陳述する。

卵凍結用具(特許4324181号)、卵凍結保存用具及び筒状部材保持器具(特許4373025号)を発明し、平成13年5月頃から、世界に先駆けて卵凍結保存容器クライオトップの製造・販売を開始した控訴人会社の代表者のこの陳述こそが、卵子・胚の凍結保存の分野における、常識・経験則に他ならない。

控訴人のカタログ(甲19)3頁において、

MAIN ADVANTAGES

- Survival rates over 90%
- Best cooling and warming rates in the market
- Same protocol, easy to follow
- Valid for all stage of development: oocytes, PN, embryos and blastocysts

訳文

主な利点

- 生存率 90%以上
- 市場最高の冷却・加温速度
- 同じプロトコルで分かりやすい
- 全ての発達段階において有効：卵子、PN、胚、胚盤胞

すなわち、「生存率90%以上」と生存率100%でないことを明らかにし、また、控訴人のカタログ（甲19）5頁においても、ヒト検体におけるクライオトップ生存率において、「生存率90～95%程度」と生存率100%でないことを明らかにするものである。すなわち、「マイナス196度からプラス37度までの温度変化」を経験する「解凍卵子の生存率を100%を達成する」ことは、卵子・胚の凍結保存の分野における常識に反することである。

原判決は、「前記(2)ないし(6)の説示に照らせば、研究報告1ないし5はこの陳述を裏付けるものではなく、他にこの陳述を裏付ける的確な証拠はないから、これを採用することはできない。」と判示するが、世界に先駆けて卵凍結保存容器クライオトップの製造・販売を開始した控訴人代表者の長年の研究・開発の実績に基づく陳述の価値評価を誤ったものであり、重大な事実誤認である。

2-3 研究報告5について

「第34回日本受精着床学会総会・学術講演会プログラム・講演会抄録集」（甲33）には、被控訴人代表者の作成名義にて下記の記述がある。

非侵襲性ガラス化法とした。このガラス化法は、一般患者由来胚はもちろん、未成熟卵子、成熟卵子でも、またガン患者や高齢患者由来の低グレード卵子、胚においても解凍後ほぼ100%の生存率が得られる極めて有効で安全な非侵襲的ガラス化法（The Cryotec法:2012）として完成し、欧米を中心

すなわち、「このガラス化法は、一般患者由来胚はもちろん、未成熟卵子、成熟卵子でも、またガン患者や高齢患者由来の低グレード卵子、胚においても解凍後ほぼ100%の生存率が得られる極めて有効で安全な非侵襲的ガラス化法(The Cryotec法:2012)として完成し」と記述されている。

「一般患者由来胚」と「未成熟卵子、成熟卵子」と「ガン患者や高齢患者由来の低グレード卵子、胚」のいずれについても、「解凍後ほぼ100%の生存率が得られる」(下線は代理人による)ことを宣明するものである。上記の記述は、

- (1) 客観的には、「一般患者由来胚」と「未成熟卵子、成熟卵子」と「ガン患者や高齢患者由来の低グレード卵子、胚」のすべての卵子・胚について、「マイナス19.6度からプラス3.7度までの温度変化」を経験する「解凍卵子・胚の生存率100%」を達成できないことが、この分野における常識であることを示すものであり、
- (2) 主観的には、平成28年9月15日あるいは16日の時点において、被控訴人代表者自ら「The Cryotec 法:2012」は「一般患者由来胚」と「未成熟卵子、成熟卵子」と「ガン患者や高齢患者由来の低グレード卵子、胚」のいずれについても「100%の生存率」が得られないことの認識を示すものに他ならない。

この点について、原判決は「研究報告5の内容を子細に見ても、上記生存率がどのような症例を対象としたものか説明されておらず、手順を厳密に遵守して実施した症例のみを対象としたものか明らかでないから、研究報告5によっては、手順を厳密に遵守して被告製品を用いて卵子を凍結保存し融解したとしても100%の生存率を達成することができないとは認めるに足りない。」と判示する。

重大な事実誤認である。原判決は「手順を厳密に遵守して実施した症例のみを対象としたものか明らかでない」とするが、「手順を厳密に遵守して実施した」ものでなければ、それは(The Cryotec法:2012)ではない。日本受精着床学会総会の学術講演会において、「非侵襲的ガラス化法(The Cryotec法:2012)」を完成した被控訴人代表者自らがその成果を語っている以上、「手順を厳密に遵守して被告製品を用いて卵子を凍結保存し融解した」症例、すなわち、クライオテック法を実施した症例のみを対象とするものことは論理的帰結である。

原判決は「手順を厳密に遵守して実施した症例のみを対象としたものか明らかでない」とするが、「手順を厳密に遵守して実施した症例」が含まれていることを可能性はないから、かかる認定は判決に影響を及ぼす重大な事実誤認である。

百歩譲って、「手順を厳密に遵守して実施した症例のみを対象としたものか明らかでない」との心証を原審が持ったのであれば、原審はその点について当事者に立証を促すべき釈明権を行使すべき義務がある。念のため、釈明権の不行使が審理不尽の違法であると断じた最高裁判所判決の要旨を引用する。

「ある地域を所有することを前提とし、同地域上に生立する立木の不法伐採を理由とする損害賠償の請求の当否を判断するに当り、当該地域の一部のみが請求者の所有に属するとの心証を得た以上、さらにその一部に生立する立木で伐採されたものの数量、価格等について審理すべきことは当然であり、この際右の点について、従来の証拠のほかに、さらにあらたな証拠を必要とする場合には、これについて全く証拠方法のないことが明らかであるときを除き、裁判所は当該当事者にこれについての証拠方法の提出を促すことを要するものと解するのが相当であり、このような措置に出ることなく、漫然証拠がないとして請求を棄却することは、釈明権の行使を怠り、審理不尽の違法を犯すものというべきである。(昭和39年6月26日最高裁判所第二小法廷判決)(下線は訴訟代理人による)

上記最高裁判決の基準を当てはめても、原審が「手順を厳密に遵守して実施した症例のみを対象としたものか明らかでない」との心証を持ったとしたら、その点について当事者に立証を促すべき釈明権を行使すべきであり、釈明権を行使しなかったことは審理不尽であることは明らかであるから取り消されなければならない。

2-4 研究報告1について

被控訴人代表者が作成者に名を連ねる(平成25年(2013年)7月に開催されたヨーロッパ生殖医学会の年次会議における「ヒト卵子の凍結保存のための二つの異なるガラス化法の比較」と題する研究報告)には以下の記載がある。

Table 2: Comparison of clinical outcome in frozen/ Warmed oocytes recipients cycles using cryotop and cryotech

	Cryotech	Cryotop	p value
No. of oocytes warmed	275	336	
No. of oocytes survived	267	319	
Survival Rate (%)	97.17	95.14	NS
No. of fertilized oocyte	240	274	
Fertilization Rate (%)	90.72	86.15	NS
No. of cleaved day 3 embryos	232	251	
Cleavage Rate (%)	96.85	91.88	P<0.05
Total no. of grade A & Grade B embryos	225	240	
Pregancy Rate (%)	54.83	40.57	P<0.05

訳文

表 2 : cryotopおよびcryotechを用いて凍結されたまたは融解された卵子レシピエントサイクルの臨床結果の比較

上記は、cryotopおよびcryotechを用いて凍結されたまたは融解された卵子レシピエントサイクルの臨床結果を比較したものである。

控訴人のCryotop製品と、被控訴人のCryotech製品が代替可能であることを前提とするものであり、控訴人製品と被控訴人製品の競争関係・競合関係を示すものに他ならない。

上記について、原判決は、「ア ロタンダ・ヒト生殖センター（ムンバイ・インド）等の担当者らは、研究報告1において、平成22年（2010年）10月から平成24年（2012年）8月までの間に成熟卵子をクライオトップ法又はクライオテック法により凍結して融解した症例の生存率について、前者の方法では95.1%（336個中319個）、後者の方法では97.1%（275個中267個）であったと報告している（甲14の1ないし3、15の1、2）。」と認定するものである。

「後者の方法では97.1%」すなわち、「Cryotech」での生存率は97.1%

であると表示されているものである。被控訴人代表者も名前を連ねる研究報告であるから、プロトコルの管理についても被控訴人代表者が関与できたものである。また、この研究報告はヨーロッパ生殖医学会の年次会議において正式に発表された資料であるから、内容の真実性は高いものと認められる。

すなわち、「Cryotech」での生存率は97.1%であって、100%を達成できてないことは明らかである。

この点、原判決は、「作成日付が記載されておらず、被告代表者の依頼に応じて、現在閉院となっている上記センターの研究室長の肩書で作成されたゴータル・ガンディ氏（乙12の1、2）の書簡」による、同年1月に前記センターのチームに加入した胚培養士が担当し、卵子を粗悪に取り扱ったために結果が芳しくなく、生存率を引き下げたとの説明を根拠にして、「研究報告1によっては、手順を厳密に遵守して被告製品を用いて卵子を凍結保存し融解したとしても100%の生存率を達成することができないとは認めるに足りない。」と判示するものである。

ヨーロッパ生殖医学会の年次会議において正式に発表された資料の証拠価値よりも、作成日付が記載されておらず、被控訴人代表者の依頼に応じて、現在閉院となっている上記センターの研究室長の肩書で作成されたゴータル・ガンディ氏（乙12の1、2）の書簡の証拠価値を優先するものであって、採証法則に反する誤った事実認定である。

原判決は「クライオテック法により実施した症例には、その完成前に実施されたものも含まれていた可能性がある。」と指摘する。仮にそうであれば、「その完成前に実施されたもの」はクライオテック法ではない。

本件研究報告は、「ヒト卵子の凍結保存のための二つの異なるガラス化法の比較」として、クライオトップ法とクライオテック法を比較したものであるから、原判決が指摘する「可能性」はありえない。原判決はありえない可能性を作出した上で、証拠評価を歪めるものであり、重大な事実誤認がある。

2-5 乙12の1、2を作成したゴータル・ガンディ氏は、被控訴人代表者桑山

正成の編集にかかる出版物である「Vitrification in Assisted Reproduction A User's Manual」(訳文：生殖補助医療におけるガラス化凍結 ユーザーズ・マニュアル) (甲26の2) は、以下の第3章を有する。

Vitrification of Oocytes: General Considerations

3

Goral Gandhi, Soumya Ramesh,
and Aisha Khatoon

(甲26の6)

「第3章 卵子の凍結にかかる一般的考察」(ゴータル・ガンディー、ソウミヤ・ラメシュ、アーイシャ・カツーン著) (甲26の1) は、次のとおり記述する。

Our Experience with Oocyte Vitrification

A comparative study to evaluate the outcome of oocyte vitrification using the Cryotech method, observed in an egg donation program with fresh versus frozen oocyte, was done at Rotunda – The Center for Human Reproduction. The data was evaluated over a period from January 2011 to December 2011. A total of 1,210 oocytes were obtained from 112 oocyte donors. The analysis included a total of 1,029 mature oocytes, 485 oocytes were used in fresh cycle, and the remaining 544 oocytes were vitrified using the Cryotech method. The vitrified oocytes were subsequently warmed using the Cryotech warming method. The warmed oocytes were fertilized by ICSI, and the embryos thus created were transferred into the recipients. A total of 171 embryo transfer cycles were performed on day 3 of embryo development. The parameters, which were assessed and compared between the two groups, included survival rate, fertilization rate, cleavage rate,

embryo development, and the clinical pregnancy rates (Tables 3.3 and 3.4).

With these encouraging results, it is proved that Cryotech vitrification is an effective method that preserves the potential of vitrified oocytes to fertilize and further develop, which is similar to fresh oocytes. Excellent clinical outcome indicates that this technology can be applied successfully for the oocyte vitrification in various indications and egg donation programs. Thus, Cryotech vitrification holds a great promise in infertility management by offering a successful oocyte vitrification program.

訳文 卵子のガラス化凍結の経験

Cryotec法を使用したガラス化卵子の結果を評価するため、卵子提供プログラムでの新鮮卵子と凍結卵子の比較試験がロタンダ・ヒト生殖センターで行われた。2011年1月から2011年12月の期間におけるデータが評価された。112の卵子ドナーから合計1210の卵子が得られた。分析には、合計1,029の成熟卵子のうち、485の卵子は新鮮サイクルで使用し、残

りの544の卵子はCryotech法を用いてガラス化凍結した。その後、ガラス化凍結した卵子はCryotech融解法を用いて融解された。

融解された卵子はICSI（顕微授精）により受精され、こうして作られた胚はレシピエントに移植された。合計171個の胚移植サイクルがDay3の胚で行われた。

生存率、受精率、分割率、胚発生率および臨床妊娠率を2つの群間で比較した（表3.3および表3.4）。

これらの奨励的な結果により、Cryotechガラス化凍結は、新鮮卵子と同じように、ガラス化凍結した卵子の受精能および発生能を維持する有効な方法であることが証明されている。優れた臨床結果によって、この技術が様々な症状、および卵子提供プログラムにおける卵子のガラス化凍結にうまく適用できることを示している。

したがって、Cryotechのガラス化法は、好結果の卵子のガラス化プログラムを提供することによって、不妊症治療において大きな可能性を秘めている。

Table 3.3 Comparative data showing survival, fertilization, and cleavage rates between fresh and frozen-thawed human oocytes

	Fresh oocytes	Frozen-thawed oocytes	P-value
No. of oocytes	485	544	
Survival rate (%)	NA	94.5	
Fertilization rate (%)	83.0	80.9	NS
Cleavage rate (%)	96.5	94.4	NS

Table 3.4 Comparative data showing clinical outcome between fresh and frozen-thawed human oocytes

	Fresh oocytes	Frozen-thawed oocytes	P-value
No. of cycles	80	91	
Pregnancy rate (%)	56.3	54.9	NS
Implantation rate (%)	28.0	31.1	NS
Biochemical pregnancy rate (%)	8.8	8.0	NS
Missed abortion rate (%)	11.1	12.0	NS
Live birth rate (%)	45.0	45.1	NS

表の訳文

表 3.3 新鮮ヒト卵子と凍結—融解ヒト卵子の生存率、受精率、そして卵割率の比較データ

	新鮮卵子	凍結—融解卵子	P 値
卵子数	485	544	
生存率 (%)	NA	94.5	
受精率 (%)	83.0	80.9	NS
卵割率 (%)	96.5	94.4	NS

表 3.4 新鮮ヒト卵子と凍結—融解ヒト卵子の臨床結果比較データ

	新鮮卵子	凍結—融解卵子	P 値
卵子数	80	91	
妊娠率 (%)	56.3	54.9	NS
着床率 (%)	28.0	31.1	NS
生化学的妊娠率 (%)	8.8	8.0	NS
稽留流産率 (%)	11.1	12.0	NS
出生率 (%)	45.0	45.1	NS

すなわち、ゴーラル・ガンディ氏は自らの研究報告において、Cryotech法による、凍結・融解卵子は544個中、生存率は94.5%であると発表し、生存率が

100%に達してないことを公表するものである。

2-6 研究報告2について

ヒト未受精卵凍結の検討—cryotopとcryotechとの使用経験—（2014年（平成26年）7月1日付日本生殖医学会雑誌）（甲23）には以下の記載がある。

【目的】晩婚化の影響で、未受精卵凍結の重要性が高まり社会的にも注目を浴びている。今回我々は成功率の低いと言われている未受精卵凍結に対して検討を行い、臨床上有用な結果を得たので報告する。**【方法】**凍害保護液として、A：北里バイオファルマ社（cryotop safety kit）B：リプロサポートメディカルセンター社（cryotech kit：凍結法300μlのESに15min静置その後VS1の中央部に胚を置く、胚が表面に浮遊した胚を液の底に置く。その後VS2に移動し、胚の収縮を確認し凍結を行う）の2社を用いた。両社の違いとして、A法はESを少量加えていくことに対しB法は一定量で操作を行うことができる。A・B両方の利点・欠点はそれぞれ、A法は胚が観察しやすい・操作過程が多い、B法は操作が容易・浮遊した胚を見つけにくい。**【結果】**A：蘇生率70.0%（7/10）受精率71.4%（5/7）胚盤胞到達率28.6%（2/7） B：蘇生率53.9%（7/13）受精率71.4%（5/7）胚盤胞到達率57.1%（4/7）であった。**【結論】**Cryotop：長年使用しており、操作が容易だが、胚盤胞到達率は28.6%に留まった。Cryotech：操作に慣れていないこともあり胚が見にくい欠点があった。しかし、胚盤胞到達率57.1%と高値を示した。今回は検討数が少ないため、さらに検討を重ねていきたい。

上記の報告書においては「蘇生率」の用語が使用されているが、凍結状態から蘇生する意味で用いられており「生存率」と同義である。（凍結保存状態から復活するのであるから、単に「生存」よりも「蘇生」と表現する方が妥当であろう。）

Aは「長年使用してきた」北里バイオファルマ社のcryotop safety kit、すなわち、控訴人製品を使用した結果であり、Bはリプロサポートメディカルセンター社のcryotech kit、すなわち、被控訴人製品を使用した結果である。その集計は次のとおりである。

- 1 「ついに解凍後100%生存の画期的な凍結手法 「The Cryotec Method」 の開発に成功！」における「解凍後100%生存」
- 2 「2012年、ついに解凍後100%生存の画期的な凍結手法の開発に成功。」における「解凍後100%生存」
- 3 「生存率100%を実現、クライオテックの凍結保存」における「生存率100%」
- 4 「融解後の生存率100%と臨床成績の向上」における「生存率100%」
- 5 「胚盤胞、分割胚そして卵子の生存率が100%になります。」における「生存率100%」
- 6 「卵子と胚で同一のプロトコールで100%の高い生存率が得られます。」における「100%の高い生存率」
- 7 「Cryotech Create sure Happiness by 100% survival vitrification!」における「100% survival vitrification!」
- 8 「100% Post-warm Survival」
- 9 「Anyone can obtain 100% post-warm survival rates for human oocytes and embryos by strictly keeping Dr.Kuwayama's original vitrification/warming protocol. It is called "the Cryotec method".」における「100% post-warm survival rates」
- 1 0 「Only 100% survival proved solutions are provided.」における「100% survival」
- 1 1 「WELCOME TO "THE 100% SURVIVAL CLUB"!」における「100% SURVIVAL」
- 1 2 「By strict adherence to specific details of The Cryotec Method, the clinical embryologist is assured of achieving 100%, literally 100%, survival of normal oocytes and embryos.」における「achieving 100%, literally 100%, survival」
- 1 3 「SUPER-VITRIFICATION Create sure Happiness by 100% survival vitrification!」における「100% survival」
- 1 4 「CRYOTECH ADVANTAGE; "WHY 100% SURVIVAL? "」における「100% SURVIVAL」

以上